



東北大

# きょうかん

発行  
東北大学教育学部  
関東地区同窓会

事務局  
〒130-0024  
東京都墨田区  
菊川 3-8-6-703  
(石森 ミネ子方)

電話 03-3635-2710  
mineko.ishimori@nifty.com

題字：江川 亮

ご挨拶  
「歴史に学び、情勢に対処を！」  
—きょうかん絆の二層の拡大・強化を—



「きょうかん15号」が皆様の手元に届く秋、例年ならば各種活動に勤しんでいる好季節でした。しかし、今年には「新型コロナウイルス禍」に収束の兆しが見られず、「新しい生活様式」への対応等、会員の皆様にはなんとなく不安で落ち着かない日々をお過ごしのことと存じます。

平素は「きょうかん活動」にご支援ご協力をいただき心から御礼申し上げます。

今年度は二年に一度の総会・懇親会の開催年度にあたりますが、前述の「新型コロナウイルス感染拡大防止」の観点から中止とさせていただきます。事情ご賢察の上、ご了承ください。つきましては、今回は「書面表決」にて議案決定をさせていただきます。同封の総会資料をご覧ください、「書面表決書」にご署名・賛否をご記入の上、十一月三十日までご返送くださるようお願いいたします。

今回の新型コロナウイルスパンデミックは、約百年前に起こった「スペイン風邪」を想起させます。

一九一八年、アメリカ陸軍基地での感染発生が第一報とされ、アメリカからヨーロッパ・世界各地に拡大、感染者は当時の世界人口の三割にあたる約五億人、推定死者は最大五千万人。日本でも大変

な騒ぎだったと記録されています。私が気になったのは、「スペイン風邪」の名称の由来とその要因です。時は第一次世界大戦の最中、アメリカを初め参戦国では国民の士気維持のため報道統制をしき、実態の報道が伏せられました。反面、中立国スペインでは自由に報道されたため、あたかも発生源と人々に信じられたとの事。こうした史実から、正確な情報入手・的確な判断・迅速な対応の重要性を再認識している昨今です。

今回の新型コロナウイルス、発生は昨年十一月中国の武漢。その後、世界各地に感染拡大、米ジョンズホプキンス大学の十月十七日集計では、全世界感染者数三九三三万人、死者百万人。国別では、米国の感染者数八〇五万人(死者二万人)を筆頭に、インド七四三万人、ブラジル五二〇万



①「川内キャンパスの教育学部棟」  
春の青葉の風景



②「紅葉の映える川内キャンパスへの道」

人と猛威を振っています。一日も早いワクチンの実用化が待たれます。それにしても我々を取り巻く世の中の現状、社会や政治の劣化が気になります。情報の隠蔽・操作、事態の過小評価、対策の先送り等のなんと多い事か！危機的状況下では、私共一人ひとりが、対立ではなく協調を前提に自主的な対応を心がけ、過去の歴史を教訓とし、正確な情報入手と分析、そして迅速・的確に対応することが極めて重要と考えます。留意しましょう。最後になりましたが、会員の皆様のご健勝とご発展をお祈りいたしております。

※「ドローンで母校の各キャンパスを巡ってみましょう！」  
パソコンの検索で「ドローンで見る東北大学」と入力し、検索してください。

## ◆第16回 東北大学教育学部関東地区同窓会 総会・懇親会開催中止のお知らせ！

秋も深まり木枯らしの季節間近のこの頃、会員の皆様にはご健勝とお過ごしのことと存じます。2年に一度開催の関東地区同窓会総会・懇親会ですが、ご承知のように「新型コロナウイルス禍」に収束の兆しが見えない現状を考慮し、残念ながら今年度の開催(第16回)は中止とし、「書面開催」とさせていただきます。

つきましては、同封の「総会資料」をご覧ください、「書面決議書」(ハガキ)にご署名及び各議案への賛否をご記入いただき、令和2年11月30日まで、ご投函くださいますようお願いいたします。

新型コロナウイルスが一日も早く終息し、穏やかな日常に戻ることを心から願っております。皆様のご健勝を心からお祈りいたしております。

東北大学教育学部関東地区同窓会会長 星 永揚

ご挨拶

「コロナ禍における奮闘」



東北大学教育学部同窓会会長  
教育学部研究科長 教育学部長  
八鉞 友広  
(教育学博士課程卒)

昨年四月より、教育学部長・研究科長を拝命し、今年度はその二年目となります。本来であれば、教育学部・教育学研究科の躍進に向けて大いに努力すべきところでありますが、ご承知の通り、昨年度末以来コロナ禍のなかにあり、現在も、日々その対応に追われているというのが実情です。

東北大学は、他大学に比しても、比較的早期から、すべての授業をオンラインで実施する方針を決定し、年度開始時期の遅延も最小限にとどめました。

東北大学の方針決定後、教育学研究科におきましても、ただちに、オンラインによる授業の準備に着手しました。すべての授業をオンラインで実施するという、これまでになかった経験のない、まさに驚天動地の事態でありましたので、教員の困惑も一方ならぬものがあつたと思われまふ。おそらく、この事態への対応力としては、学生の方がむしろ教員に勝つていたのでないかと思われまふ。これらの学生の力にも依拠しながら、なんとか半期を乗り越え、後期の授業に向かいつつある、というのが、本挨拶執筆段階の状況です。昨年度のご挨拶においても述べましたように、教育学研究科は、

二〇一八年度より、教育情報学教育部・研究部と統合をいたしました。ICT教育をはじめとする教育情報学の専門家の先生方に来ていただきましたことは、このような事態となつてみますと、きわめて心強いものとなりました。実際、研究科で開催した「オンライン授業説明会」などは、これらの先生方のご尽力なしには到底実施できなかったと思われまふ。

コロナ禍は、いまや地球全体を覆いつつあります。地球上のほとんどの大学が、おそらくはオンラインによりその授業を展開していることでしょう。私たちは、いま人類史上においてかつてない経験を蓄積している渦中にあるといつてもよいでしょう。このような経験それ自体についても、教育的な視点からの研究が必要となつているのかもしれない。研究科の重要な研究課題となるものです。

授業のみならず、教授会や各種の委員会、シンポジウムにいたるまで、あらゆる会合が、現在、オンラインでおこなわれています。余儀なくしてこのような対応をするうちに、私たちは、思わぬ可能性にも気がつき始めています。ウェビナーといわれる会議もそのひとつです。オンラインによるセ

ミナーのことであり、これを用いれば、海外のいくつもの大学をつなぎ、きわめて容易に国際シンポジウムを開催することができました。すでに3回にわたるウェビナーを開催しました。この秋にも、数回のウェビナーが予定されておりまふ。教育学研究科が主催した国際シンポジウムとして、これは最多となるかもしれません。

以上、コロナ禍のもとにおける教育学部・教育学研究科の奮闘ぶりについて、ご紹介させていただきました。同窓会の皆様におかれましては、今後ともご尽力のほど、お願いする次第です。

東北支部の仲間から

「新コロナ禍の中で」

東北大学教育学部同窓会東北支部長  
渡邊 宣隆 (学校教育 68年卒)

今年の春から新型コロナウイルス感染拡大により毎日が自粛の日々でした。一時収束に向かうのかなと思われましたが一日の感染者数は関東地区で横ばい状態、最近では東北、特に仙台を中心として宮城県は連日二桁前後で推移しております。高齢者の自粛生活はいつまでと愚痴が出てしまひます。

改めてこの度の新型コロナウイルス感染症に罹患された方とご家族、関係者の皆様にご見舞い申し上げます。また、医療機関や行政機関の方々など感染拡大防止に日々ご尽力されている皆様に深

く感謝申し上げます。拡大防止対策や経済対策には色々批判的な意見が聞かれますが、今は提案を出しながら皆で知恵を出し合う時ではないかと思つていまふ。

さて、コロナ禍の中での本会活動の一端を紹介します。令和二年に入り年頭の役員会は開催できましたが三月の顧問会や会計監査、五月の役員会は新型コロナウイルス感染拡大防止対策の励行を受け、一堂に会する会合は三密を避け開けませんでした。会計監査は各監事さんのご都合に合わせて個別に監査を受け七月に入りようやく終了しました。顧問会については五月に書面をもつてご意見を伺う事に変更しました。議論を交わしながら多くのご意見を聞くことができず、対面での意見交換の大切さを改めて認識させられました。役員会は大

学の行動指針レベルが一に下がつた八月に八鉞学部長さんや神谷先生のご尽力で大学が設定する感染予防策を実施することを条件に学内で二回分の内容で実施することができました。対面の会議では多くの意見が出され、今年度の総会の開催は感染拡大防止の観点から一堂に会することはせず、書面による開催に変更しました。それに伴いそれまで定まっていた会報の構成内容を変更すべく会報発行委員長には無理を承知でお願いし、印刷所での最終校正をするなど発行日直前まで忙しく動き回つても

らいました。また全会員の意見を聴取するよう、事務局を中心に慌ただしい日々を過ごし、何とか発刊までこぎつけました。

旧仙台支部が誕生して四十一年、会員の高齢化と会員数の先細りが生み出した会費納入者の激減を受け昨年度から振込手数料の本人負担や協力の募集等会員には負担をかけ心苦しいですがこの危機的状况に耐え、必死に足掻いていまふ。『何も咲かない日には根を伸ばせ』、強い風が吹いた時に本當の強い草がわかるのだそうです。いまこそ皆で手を繋ぎ、共通理解のもと地道に頑張つていく所存です。

「私の学生時代」

東北大学教育学部同窓会東北支部顧問  
阿部 琢也 (学校教育 65年卒)

私が教育学部に入學したのは、宮城教育大学の設立を数年後に控えた昭和三十六年の春でした。

当時の川内は、戦後の米軍駐留時の置き土産の、白いペンキ塗りの将校宿舎やチャペルなどが、青々とした芝生のそこかしこに建つていて、西洋的な雰囲気でした。

入学後二年間は教養部に籍を置いて、英語や第二外国語のほか、教育学・人文科学・社会科学などの授業を受講しました。

二年生になる段階で、希望進路の調査があり、教育哲学、教育社会学、教育行政学等の「教育科学科」と教員を目指す「学校教育科」に大別され、私自身は第一志

望の中学校教員英語専攻への所属が決まって、嬉しい思いがしたものでした。

二年生では、教養部の共通科目の他に専門の英語の授業が多くなり、言語学の長谷川松治先生、アメリカ文学の横沢四郎先生はじめ碩学の先生方の教えを受けることができたのは幸せでした。

三年生以降は主として片平の文学部の授業を受けることが多くなり、あの懐かしい市電に揺られて移動したものでした。

折しも海外の言語学の分野では「構造言語学」が脚光を浴びており、ソシユールやチョムスキーなどの研究成果を、当時の東京教育大学の若手言語学者の太田朗先生や安井稔先生が、著書や講義を通して日本に紹介されていました。

夏の暑い時期、片平での連続講義に通って、世界の言語学の潮流を知ることができたのは、大きな収穫でした。

我々英語専攻生は十二人でしたが、その内の男子学生は三人だけでした。そのせいか、三人の結束は固く、石巻出身のT君と私は、よく山梨県出身のS君の下宿に集まって、酒を酌み交わしながら話に夢中になったものでした。

大学三年の十一月二十三日の朝も、たまたま私はS君の下宿目覚ましをかけていました。そこに彼が「阿部くん、大変なことが起こったよ！」と駆け込んで来て、

手元の英字新聞を突き出したのです。そこには大きな活字で

PRESIDENT KENNEDY IS ASSASSINATED

という見出しが躍っていました。

実は、日米間で研究を進めて来た衛星によるテレビ中継の初放送が、たまたまこの日に予定されており、本来であれば祝賀的な番組が伝えられるはずでした。その記念すべき第一報が、大統領暗殺の一部始終であったことは、運命の悪戯と言わしめられません。

その日の英字新聞は、今でも私の手元に残っています。セピア色の紙面に目をやると、半世紀以上も昔の、朝のひとコマが鮮やかに蘇ってくるのです。

### 会員の声

「コロナ禍で露呈している問題」  
東北大学教育学部関東地区同窓会副会長  
堀籠 英夫(教育社会 61年生)

#### 「毎日が日曜日の生活」

毎日が日曜日はコロナ禍に始まった事ではないが、以前にもまして巣籠もり生活になったので健康維持の為に「朝顔や 日の出の前に一万歩」を心がけ四時半頃から一時間ほど歩いている。好きなGOLFも自重して人との接触を避けているので、毎朝のウォーキングは貴重な健康維持運動である。

外部との接触(会話)は二、三日おきにかかってくる墓地案内の電話ばかり、最近ではそれも楽し

みの一つになってしまった。最初はおどろきなど思っていたが良く考えてみると、いざその段になると困惑するらしいと聞き、この頃は真面目に聞くようにしている。

昨年までは年四回、いろんな分野で活躍(?)している仲間達と懇談する機会があった。そこで世の中の最新の動きに接する事が出来、刺激を受けて脳の劣化を多少防いでいたが、それがかなわなくなり、劣化のスピードが早まっているように感じている。その表れが運転免許の更新時に現われた。高齢者が運転免許証を更新する時には認知症検査が義務づけられている。私は後期高齢者になってからの運転免許証更新は三回目であるが八月に受けたが、成績が毎回下がってきている。一回目は九十点、二回目は八十点、そして今回は七十点(追試無し)の合格点は七十五点以上)。辛うじて追試無し通過の情けなき。

種々の分野で活躍(?)している後輩達の話聞くのは大変だが、なる。先輩づらして謙虚に耳を傾ける事が少なかったことを反省し、最近ではIT分野でもズブシロに近い事を痛感し、素直に耳を傾けるようにしている。

「第四次産業革命・キラーテクノロジーの相対的力量の後退」  
コロナを契機に仕事のやり方を変える必要があるとの声が上がっている、広義の意味のインフラは

大丈夫か?  
特に第四次産業革命の時代に突っからのテクノロジーの変容と進歩はめざましく、キャッチアップできる代物ではないことが分かった。ITの主役はBIG DATA、AI、5Gに代表される通信分野に移り、これらのテクノロジーをベースにしたサービス・ビジネスが世界経済を牽引するようになってきている。  
世界の経済を牽引しているGAFAMそれにM社の世界経済に占める位置、それに加え最近騒がれている「The Top Five Club」等中国系企業が活躍する分野等、中国系企業の活躍は米中の経済問題から国防問題にまで発展して来ている状態。  
こんな中で日本のポジションはどうであろうか、テクノロジー分野では、何処をとっても先進国ではB級からC級のランクであろうか、それも年々ランクを下げていく、多くの分野で中国は元より韓国や台湾やシンガポールよりレベルが下であることを念頭に置く必要がある。しかも年々下がっている事を忘れてはならない。失われた十年と言う言葉があれば私はこのテクノロジー分野を挙げたい。  
この下げ止まりを、新政権に期待したい。デジタル省が出来たというが目的は各省庁独自に運営管理していたシステムを一元管理、統合し行政分野の紙ベース処理を電子化することにあるらしい。こ

れだけに止まらず広くデジタル分野のレベルアップに尽力いただきたいものだ。科学技術分野の特許取得状況を見ても、年々取得件数ランクを下げ、米国や中国に大きく後れを取っている。

第四次産業革命の担い手であるIT関連の特許取得件数(最大の米国)をみると過去の怪物と言われたIBMがダントツで他のGAFAM+Mといわれる五社を含めて大部分を占め、第四次産業革命が進展しつつあることがうかがえる。

コロナ禍で各国が経験したこと、今後の働き方の有り様がどうあるべきかと言う課題を突き付けられたことがその一つにある。最新テクノロジーを駆使して働き方変容を模索するにしても、最新の技術が伴わなければ前には進まない。

この問題の解決は自助で解決できるレベルのものでないことは明白。現政権政党の綱領には明治時代から自助がまず最初であり、次に共助、最後に公助であるそうだが、私影響を受けた国際企業では真逆の考えだったことが思い起こされる。

「自助 共助 公助の順序?」  
わが国でも小学校からプログラミング教育が義務化されるようだが、他国に遅れる事三年(韓国との比較)、アジア諸国でも遅い方のスタート。

第四次産業革命のキラー技術教育がこの有様、学校には設備が十分整ってない、先生がいない。こ

れらは自助でやるべき代物では決してない。民も官も公助で環境を整備し、その後に自助で頑張ってもらわなければならない。

【補足】

一人種差別問題と命の値段

次に多国籍企業の人種差別観について、経験したことを記したい。IBMのみならず当時一流と言われた多国籍企業は世界に百ヶ国以上(IBMは当時百二十数ヶ国)に事業展開しており、人種問題など考えても見なかった。いろんな国の人種が一つの集団(チーム)として戦っている感じ(プロ野球とかサッカーチームの感じ)。今アメリカで起きてくることは、眠っていた潜在的な意識(?)が権力者の行動・言動により掘り起こされたのではないかと思う。大坂なおみ選手の七枚のマスクには心を打たれた、七枚作製したことを事前に公表し全てを披露できたことはあっぱれで、多くの人の心を打ったこととおもう。

老婆心ながら、全米優勝者に日本テニス協会が送っていた八百万円の賞金を今年は大坂選手に送ることを見合わせると発表があり、まさか米国現政権に付度しての決定かと案じたが理由は財政問題とか、はっとした(わが国では付度精神が伝統的にあるので)。命の値段は人種問題のみならず、年令にも? コロナ患者の救済では若者を優先し高齢者は後回しにさ

れているのでは?と報じられたが、先進国でもこうしたことが話題に上ったが、年齢のみならず社会的地位(?)により差別が存在することが表面化したように思う。高齢者は自己防衛するしかない(世の慣わし?)。EUのある国では一時患者が溢れ、やむを得ずブライオリテイ オペレーションに走らざるをえなかったと報じられた。

EUでもドイツは別格で世界の模範となるオペレーションを展開しているように思われる、やはりリーダーの力量? それとも科学者だからか? コロナを境にさらに国民からの信頼がアップしたとか。

ドイツ国際平和村

ドイツ北西部(デュッセルドルフの近く)のオーバーハウゼンと言う所にドイツ国際平和村があり、戦闘地区から負傷した難民を受け入れ負傷者に医療を施している。全てボランティアで運営されており、ボランティアの方々はコロナ禍の中でリスクを顧みず活動している。

ドイツ政府からは援助も制約も受けず、全てボランティアと献金とドイツ国内の医療機関の協力で運営されている(三百を超える病院の協力があつたがコロナ発生後、コロナ患者対応と病院経営の問題から百病院程度まで減った?)。日本人からの協力も大きいと聞く、関心のある方は、ドイツ国際平和村で検索してみてください。

「まさかという坂」を経験して! 後藤 光 (学校教育 64年卒)

学生時代は北山の学生会館で過ごした。営業希望で就職した企業では毎月、半期の販売目標が指示されたがほぼ毎月達成した。入社後二年目から連続して総部長表彰(のちの社長賞)を受賞した。その後、本社の教育部、人事部に異動。教育部の管理職時代には、有給をとり会社に内緒で社外の講演や合宿研修などを担当。しかし、若い時からの夢であった「研修コンサルタント」を目指すべく五五歳で依願退職した。同時に「産業カウンセラー」の資格取得。カウンセラーの仕事は知り合いの「再就職支援会社」からすぐお呼びがかかり十年間担当した。研修コンサルタントの仕事は教育部時代の人脈を頼りに次第にスポンサーも増え、最盛期には企業年俸時年取の2倍近くの収入を得るようになった。

そのような時、まさかと言う「坂」がやってきた。ある時、既に東北大学に勤務していた会館仲間から呼び出された。彼は小生の現状を知っていた。「この度、文科省から新たなプロジェクトが承認された。後藤君には博士学生の就職支援を担当して欲しい」とのこと。言下に断ったが、粘り強い彼の説得に根負けして引き受けることにした。

平成十八年四月に東北大学に赴任した。「特任教授を命ずる」の総長辞令には驚きと緊張感が走った。事務所は青葉山の総合研修棟であり、担当する博士学生は全員が理系であった。

再就職支援会社での経験を踏まえた説得力ある応募書類の作成方法、就職四季報を見ては、学生の希望する企業へアポをとっての売り込みであった。大学名と訪問目的を話すと、どの企業からも歓迎された。担当した博士学生の希望企業への就職は順調に進み大学からは「感謝状」を頂くまでになった。八十歳の直前までこのように母校に貢献出来、高い給料を頂いたことに感謝していると同時に、まさかの「坂」を登り切った今は、ほっとしていると同時に「ボケ防止」に留意している昨今である。

「国枝慎吾君との出会い」 阿部 孝 (教育行政 69年卒)

一九九九年(平成十一年)、私の勤務する学校法人の高校に二人の車イス通学生が入学しました。その一人が国枝慎吾君でした。彼は九歳で歩行機能を失い、そののち車イスで歩行機能と出会い、柏市の吉田記念テニス研修センターを拠点に世界を駆け巡ることになります。

最初の成果は二〇〇四年のアテネパラリンピックでした。二〇〇六年、大学を卒業し母校の職員になります。そして配属されたのが

私の職場、厳しい体躯に人懐っこい笑顔が印象的でした。今思うと、卒業後の自立と競技生活の継続の両立をどのように図るか、悩んだ末の選択だったと思うのです。

在職中の彼は二〇〇六年のUSオープンで二つ目となるグランドスラム(全英、全仏、全豪)を獲得し車イステニス界の第一人者に、二〇〇七年には、一年間に全てのタイトルを獲得し年間グランドスラムを達成、二〇〇八年には北京パラリンピック優勝と活躍を続けます。

そして二〇〇九年勇気ある決断をします。「北京の後どうしようか考えた。テニス一本で生活していくことは厳しい道だけど、成し遂げられたら障害者スポーツに携わる人達に夢を与えられる」がその時の決断の思いです。そして、そのためには「自分のレベルを上げ、魅せながら勝つテニスを」と述べています。二十二歳で職員となった青年が二十五歳でプロへの決断をするこの間、ささやかなサポートをさせてもらえたことが、今では自身の秘かに自負するところとなっています。

彼には教えられることが多くありました。これはある定期刊行物に載った彼の文章です。「車イスになつて十五年ほど経つが、夢や目標に向かって挑戦できるようなったのは、障害を持つたお陰と思えるようになった。私が患った脊髄腫瘍は、死亡率が高い病気で

ある。だからこそ、いま生きていくことに幸せを感じる。命があることに感謝できるとするのは、今や強みにもなっている。命の大切さを知っているからこそ、やらなければ後悔すると思えることに積極的に挑戦できる。」

きっと、こうした念いが多くの仲間をつくり多くのサポートを可能にできたのではと思うのです。

よい年齢を迎えた私ですが、どれほどの念いをもって今日まで人生にと思うと自戒あるのみ、彼と出会ったことに感謝なのです。二〇二一年東京パラリンピック、彼の現役最後の挑戦、応援に行きます。

### 「出会いと学びの三十八年」

古橋 康子 (教育哲学 69年卒)

町内会で十六ミリ映写機を購入したのがきっかけで「子どもたちに映画を」と横須賀市の社会教育課主催の「お母さんの十六ミリ教室」で認定証を取ったのが昭和五十八年。折角取得した認定証を活かそうと思ひ、視聴覚教育機材を利用した社会教育、会員の資質の向上とボランティアを目的とした「十六ミリ試写室」に入会して三十八年が経過した。

会の活動は多岐にわたり、「どこでも素敵な映画館活動」と称して映画会だけでも年間約百回程。

図書館の視聴覚ホール、コミュニティセンター等公的施設からの依頼映画会。

また、老人ホームや福祉施設で行う定期訪問映画会。市民活動団体・グループなどの依頼映画会。そして会主催の自主映画会。地域の老人ホームや福祉施設の映画会や子供中心の映画会等は、フィルム、映写機材は図書館の視聴覚ライブラリーから借用してのボランティア。

平成十九年から始めた有料上映会は、映画館には掛りにくいメツセージ性のある映画を中心に横須賀市、他の後援をいただきながら横須賀市文化会館、他を借用し十六ミリ試写室主催で開催。今年度で二十九回になる。

時代の流れの中で、十六ミリフィルムからDVDになり、手書きやワープロからパソコンと変遷、活動を円滑にするには常に研修活動は必須。結果、大きなホールでの有料上映会や、コミュニティセンターでの上映会の依頼も承諾。

また広報活動もパソコンを駆使して年四回の「十六ミリ試写室だより」を発行。昭和五十二年に発足した会も令和二年、六冊目の記念誌を発行。継続は力なり、平成二十三年の東日本大震災の後上映した映画「地球交響曲第七番」を即チャリティ上映会にし、十年間継続して復興支援の募金をした。また平成二十五年には十六ミリ試写室がまさかの「緑綬褒章」を受賞した。

出会いと、学びを通して新しいことに挑戦する活動を続けて、思いも

よらない経験をするようになった。

新型コロナウイルスの感染拡大防止の自粛に心えて三月からすべての活動が中止。延期していた第二十九回有料上映会も九月十九日何事もなく終了した。これからも「感動する心豊かな子供たちを育み、潤いのある地域社会づくり」を願って、地域社会で視聴覚教育活動を続ける女性十四名、小さな手を合わせて継続していきたい。

### 「私の白肅生活」

諏訪 幸子 (心身障害 82年卒)

令和二年3月31日、私は38年間の茨城県職員生活を終え、定年退職しました。多くの仲間は定年後も再任用や嘱託職員として残りま

していましたが、私は再就職しないと決めていました。夫にまだ収入があつたことと、同居している90代の夫の両親に負担をかけたくなかつたことがその理由です。

義父母は二人とも、大きな病氣もなく身の回りのことは自分でしていたので、私の役割は洗濯と土・日の買い物物の送迎程度で、ご飯を炊いておけば、自分たちで食べ、片づけもしてくれていました。

夫の方が私よりも家にいる時間が長かったので、夫をあてにし働き続けていました。退職したら、家事と多少の畑仕事をしながら、たまにはショッピングや映画など、

四月からの生活を楽しみにしておりました。

ところが、昨年12月12日、義母が急逝してしまいました。高血圧で通院していた以外は持病も無く、前日も日中は畑仕事をし、食事・入浴をして通常の時間に就寝していたのに、朝になったら冷たくなっていました。かかりつけの病院に搬送してもらいましたが、これといった所見はなく、「心不全」との診断になりました。

ちょうど90歳、「大往生ですね」と言う人もいましたが、本人は全くそう思っていないと思います。明日は畑に行こうか、庭仕事をしようかと考えながら床に就いたはずなので、無念だったに違いありません。

突然伴侶を失った義父の落胆は大きく、足腰が弱ってきていたこともあり、一時はかなり落ち込みましたが、2月からデイサービスに週3日通い始め、人と触れ合う時間が増えたからか日に日に元気になり、9月には98歳の誕生日を迎えました(義父の通院や食事の世話等、私の在職中は夫に全面的

にお願いしました。

家族が一人欠けるといふことは大変なことです。義母がほとんど一人でやっていた畑や庭は、雑草だらけ。私は作物も草木のこともど素人ながら、天気の良い日は外仕事。一方、夫の不在時はデイサービスの送迎時など家を空けられないので、買い物に行っても早めに帰宅するようにしています。コロナ禍でなくとも自然に白肅生活！

長雨の7月と猛暑の8月が過ぎ、やっと快適な季節がやってきました。白肅生活を日常としながらも、季節の移り変わりを楽しむ気持ちの余裕を持って、日々過ごしていきたいと思ひます。

### 「懐かしい再会」

松本 英子 (教育社会 82年卒)

この度は投稿のお声がけをいただき、ありがとうございます。いつもお世話になっております。

2年前になりますが、私たち昭和53年入学の教育学部同期会が、横浜で開かれました。

クルーズ船で夜景を楽しみながらのデイナー、カクテルパーティーの二次会、それに市内名所ツアーです。懐かしい人たちの再会、心おきないおしゃべりに加え、華やかな夜景が忘れられない思い出になりました。改めて幹事の皆さんのご尽力に感謝申し上げます。

さて個人的には最近、半世紀ぶりに懐かしいものとの再会があり



緑に囲まれた懐かしい「川内萩ホール」

ました。それはミゾカクシ（アゼムシロ）という野草です。

小学校の帰り、田んぼ道を通ると畔によく生えていました。地面にへばりつくように葉を伸ばし、花も白くて小さいので地味ですが、よく見ると形が洒落ていて可愛らしいのです。家まで小一時間の道のり、一人で歩くことが多く、寂しい時にはこの花を見ると慰められたものです。

その後、圃場整備や水路の改修が進み、ミゾカクシを見ることはなくなりました。もう見られないかな…と思っていたところ、ドライブ先の新潟県で思いがけず、この花の大群落と出会いました。農道のわだちの間で元気に咲き、花色も白からピンクまで取り取りでした。記憶の中であいまいになっていたミゾカクシの姿が、いきいきと鮮やかなものの上書きされました。うれしい再会でした。

還暦ともなると、会いたい人やものに会える機会は貴重なのだと、身に染みてきます。「また会いたい」「いつか行ってみたい」と思いつながら、先延ばししてきたこと。新型コロナウイルスが収束したら、それらを叶えるべく動き出したいです。再会が新しい発見にもつながるから素敵なことだと、期待しています。



「「昨年のこと」」  
小滝 威 (教育心理 85年卒)

今となつては少し前、コロナ禍など夢想だにしなかった頃の話になります。五月の大型連休中のある一日、三男を誘ってほとんど思いつきのように仙台に出掛けました。鉄道好き、新幹線好きの三男は、思いがけない遠出に大喜び、私は特に行先にこだわりはなかったのですが、久しぶりに東北大学のキャンパスに行ってみたくなり、三男に仙台行きを提案したのでした。

那須塩原駅から新幹線に乗車、各駅に停車した新幹線は、一時間あまりで仙台駅のホームに滑り込みました。東北新幹線が開業したのは、私が大学三年生のときでしたので、入試に行つたときは、急行で三時間以上かかったことを途中ほんやり思い出しながら、新緑を車窓から眺めていました。

大型連休の真っ只中ということもあり、仙台駅の改札から外に出ると、五月晴れの下、ペDESTリアンデッキは大勢の人々でごつた返していました。職場や家族の旅行で二、三年に一度程度は宮城を訪れることがありますが、仙台駅に降り立つのは本当に久しぶりでしたので、どこをどう行けば通りに降りることができているのか、戸惑ってしまいました。迷いながら人込みをかき分けているうちに、地下鉄の駅の表示を見付けることができました。大学時代にはなかつた地下鉄で川内キャンパスに

行けることを思い出し、初めて乗る地下鉄にワクワクしながら、駅につながらる階段を降りたのでした。

快適な乗り心地の電車が揺られながら、四つ目の川内駅で下車、そこはもう懐かしの川内キャンパスでした。仙台駅の喧騒が嘘のようなく、とても静かなキャンパス内を散策しました。もちろん何十年も前にはなかつた新しい建物もありましたが、昔の雰囲気もそこかしこに十分感じられ、大学時代の楽しかった記憶が次々に蘇つた一時間あまりとなりました。

帰りに中央通りで家族へのお土産を買い、帰路に着きました。思いがけない、素敵な連休の一日でした。



「コロナ禍と大学教育」  
長沼 真吾 (教育行政 88年卒)

ご無沙汰しております。会員の長沼です。仕事の関係で、暫く東京を離れていたために、他の幹事の皆様とも久しぶりのご挨拶となります。幹事会などで多くの先輩諸氏とお会いできることを楽しみにしておりますが、このコロナ禍により全ての会合がなくなり、「会えない」辛さに涙しております。

この「きょうかん」をお手にされている皆様も多かれ少なかれ現実の対面が減り、替わってオンラインの画面越しの対面を為されていらつしやるのではないのでしょうか。さて、このオンラインですが、コロナ禍以降、あらゆる分野で瞬

く間に広がりました。特に教育界においてその傾向は大きく、我等が母校東北大学を含む大学では、春とともに一斉にオンライン授業へと舵が切られました。そして、後期授業においても対面授業に戻す学校は少なく、約80%の学校はオンラインを主とする併用型となっています(10/1文科省調査)。

九月の日程新聞に今春東北大学に合格した都内学生のごが書かれていました。コロナ禍により入学式は中止となり、全ての授業がオンラインとなったため、一か月と経たずに仙台のアパートから東京の実家に戻り、一日七時間以上をパソコン画面に向かう毎日とありました。この記事を読んだ後、自らの大学四年間との違いに驚きと危惧を覚えました。

アメリカの心理学者であるアルバート・メラニアン等は、コミュニケーションは言語のみによつてなされるのではなく、私たちが思っている以上に視覚や聴覚から得られる非言語的要素が大きいことを明らかにしました。

研究室における遣り取りや、課外ゼミでの先輩や後輩との討論。そして居酒屋や街中の友人との語り。私は、先生や先輩方の声、間合いや視線、更には研究室の独特の雰囲気等様々な要素を通して「考え方」や「思考のスタイル」を学んだように思います。知識を得るだけならば、オンラ

イン授業でも十分かと思いますが、思考を深めたり、考え方を学んだりする大学の「学」としては全く不十分だと感じております。

オンラインへの流れは止めようありませんが、後輩が大学にて豊かな学びができるようにOBの一人として共助の方法を考えていきたいと思ひます。



「関東地区同窓会誕生逸話と歩み」

平成元年の同窓会結成から32年が経過しました。創設時の先達のご努力、その後の皆様の支えにより絶え間なく活動が繋がっており慶賀に堪えません。

「きょうかん」創刊号に江川初代会長の次のような文章があります。「顧みますと、本会創立の経緯は極めて自然な成り行きです。昭和62年11月、東北大学創立八十周年を記念しての全学同窓会関東支部設立総会が東京でありました。当時、関東地区には教育学部同窓会の組織も名簿もありませんでした。やっと連絡のついた方々のみの出席でした。席上、当然のように同窓会づくりが話題になり、準備委員会等を経て創設に至りました。平成元年は教育学部創立40年にも当っており誠に時宜に合ったものと存じます。」

次に会報「きょうかん」の誌名と題字については、当時の事務局長河田喬夫氏の記述、「東北大学教育学部関東地区同窓会に因み、



# きょうかん 第15期 (平成30年11月~令和2年10月) 維持会費ご協力のみなさま

納入ありがとうございました。(177名、敬称略、専攻別・卒業年度順)

- |  |   |  |  |
|--|---|--|--|
| <p>【教育哲学会】<br/>赤岡啓介<br/>佐藤靖志<br/>小高久典<br/>歌代真人<br/>飯野健児<br/>小泉信三<br/>菅谷 清<br/>井腰伯子<br/>高野英明<br/>石川悦三郎<br/>佐々木博<br/>市塚 守<br/>山口久子<br/>菅野 正<br/>小玉幸彦<br/>千條 武<br/>星 永揚<br/>阿部 實<br/>鈴木俊之<br/>西村孝雄<br/>杉浦洋一<br/>吾田壹明<br/>石塚米子<br/>長谷川嵩<br/>大寄 晋<br/>小林幸一郎<br/>大寄 晋<br/>石塚米子<br/>長谷川嵩<br/>吾田壹明<br/>杉浦洋一<br/>西村孝雄<br/>鈴木俊之<br/>阿部 實<br/>星 永揚<br/>千條 武<br/>小玉幸彦<br/>菅野 正<br/>山口久子<br/>市塚 守<br/>佐々木博<br/>石川悦三郎<br/>高野英明<br/>井腰伯子<br/>菅谷 清<br/>小泉信三<br/>飯野健児<br/>歌代真人<br/>小高久典<br/>佐藤靖志<br/>赤岡啓介</p> | <p>【教育心理学】<br/>荒木 廣<br/>清水俊雄<br/>佐倉三雄<br/>新井雄啓<br/>稲葉雅彦<br/>高林由幸<br/>小林順子<br/>阿部 孝<br/>阪内宏一<br/>菅澤 薫<br/>福田昭夫<br/>星 幸雄<br/>廣池幹堂<br/>岩根夫左子<br/>高木宏幸<br/>沓澤 亘<br/>高島俊文<br/>森 賢一<br/>中島洋明<br/>田中愛智朗<br/>長沼真吾<br/>佐々木英俊</p> | <p>【教育心理】<br/>須貝幸雄<br/>秋田義明<br/>齊藤哲至<br/>佐藤 全<br/>高橋靖直<br/>望月 久<br/>青木進<br/>熊谷 晃<br/>田中博康<br/>加藤正彦<br/>鈴木健一<br/>銭谷眞美<br/>大友俊敬<br/>大桃敏行<br/>猪瀬幸夫<br/>高橋寛人<br/>原 祥子<br/>寺内 誠<br/>橋本有子<br/>片桐みゆき<br/>小川慎介</p> | <p>【教育行政】<br/>45名<br/>加納正巳<br/>鈴木英一<br/>松本英子<br/>尾崎伊織<br/>高島 晃<br/>佐々木浩<br/>岩田 真<br/>上羅 廣<br/>文屋弘之<br/>今野俊治<br/>津吹 茂<br/>佐々木昭美<br/>北館博人<br/>野島節子<br/>齋藤貞夫<br/>巽 駒太郎<br/>野島節子<br/>北館博人<br/>佐々木昭美<br/>津吹 茂<br/>今野俊治<br/>文屋弘之<br/>上羅 廣<br/>岩田 真<br/>佐々木浩<br/>高島 晃<br/>尾崎伊織<br/>松本英子<br/>鈴木英一<br/>加納正巳</p> |
|--|---|--|--|

## 編集後記

今年度の総会・懇親会の開催は、誠に残念ながら、「コロナウイルス禍」の収束の兆しが見えない現状で、中止となりました。

二年間ではございましたが、事務局長という大任のもと、関東地区同窓会に携わりました。同窓会の名簿をご覧いただくとお分かり野村正宣 吉川智子 佐藤公彦

### 【心身障害】 13名

- 鈴木貞夫 高橋敏行  
田沢良介 大沼直紀  
郷家利子 員見芳房  
落合俊郎 鷲尾純一  
山森伸子 細淵富夫  
北島善夫 小林 巖  
諏訪幸子

### 【学校教育】 26名

- 安田養次郎 梶原 葉  
篠 博久 高橋渥子  
柴田洋子 高橋弘子  
石倉正身 渡辺登美子  
猪又和子 田中重富  
川野恵子 高橋睦人  
阿部鉄太郎 戸塚 薫  
永井勝利 金野久子  
渡辺成男 後藤 光  
佐々木紀子 沢登袈裟平  
落合英彦 横館厚太  
石森ミネ子 富永和彦  
鬼 宗久 星 重昭  
以上合計177名  
(令和2年10月30日現在)

のように、時代と共に減少の傾向にあります。現在は三百七十五名の方が所属しています。

私は多くの時間を、人権擁護委員として、法務局・区役所で子どもや保護者の方々と電話や手紙で連絡し合い、いじめや不登校の問題に対応しています。直接解決に向けてというより、まず相談して解決のための糸口を見出し、いけるようにアドバイスしています。

今年度の総会並びに懇親会の中は、困難な状況を的確に把握された会長様のご英断です。昨年の編集後記では、オリンピックやパラリンピックのことを書いていました。来年こそ実施できるような念願しています。

が好転し、世界が一つにまわって行くようになってほしいです。

事務局長として、二年間という短期になりましたのは、本当に申し訳ありませんが、ここまで来れましたのは、会長様や小林様のアドバイスがあつてこそと、改めて思います。

皆様におかれましては、このような状況ですから、くれぐれもお体に気をつけてお過ごしください。関東地区同窓会の発展と継続を、心から願っています。

【会員拡大にご協力を！】  
お知合いに「きょうかん」に未加入の同窓生がいたら、ぜひ、ご加入をお勧めください。お声掛けをお願いいたします。

## 第16期(令和2年11月~令和4年10月) 維持会費納入のお願い

東北大学教育学部関東地区同窓会は、平成元年7月に創設され今年で32年目を迎えました。この間、会員の皆様のご協力ご支援に支えられ着実に歩を進めることが出来ました。心から感謝申し上げます。本年11月から第16期に入っておりますが、更なる発展を期し役員一同決意を新たにしています。同窓会活動は、会員の皆様からご協力いただいております。維持会費(2年間で3,000円)により支払っております。第16期もご協力いただきますよう、よろしく願います。

本日、「郵便振込票」を同封させていただきますので、勝手申し上げ恐縮ですが、本年12月末までに、維持会費を納入いただきたくお願いいたします。

東北大学教育学部関東地区同窓会  
会長 星 永揚

●連絡先 事務局長 石森 ミネ子  
TEL・FAX 03-3635-2710  
メール mineko.ishimori@nifty.com